

---

# MIツK I -

紗蔵 豊蓮

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

МИツキ -

### 【Z-образ】

Z1575Z

### 【作者名】

紗蔵 舞蓮

### 【あらすじ】

・この勉強ばかりの高校生活。楽しみは何も無い。普通に生きている。学校に通つて、家へ帰る。ただそれだけ。  
・私はどうしたら良いの？  
・俺はこのままで良いのか？

こんな退屈な毎日がずっと続くと思つてたんだ。

高校一年生ももうすぐ終わる。勉強も運動も人並み。田立つ方ではなく、ぱっちりこなつてこることもない。要するに、平凡な女の子として生きてきた。

『幹南さんへ』

下駄箱を開けたら（ウチの高校にもパカパカきたーー）、紙片が入つてた。正確に言つと、手紙が入つてた。

まさかの漫画パターン？よく見るとノートの切れ端…。彼氏ない歴16年、幹南又柚、舞い上がりました！…。

えへ、気を取り直しまして…。

『幹南さんへ 放課後、物理実験室で待つてます。』

…や、やつぱりこれって、もしやのあれですか？16歳にしてやつと…やつと私にも春が来たあ！

思い出しながら廊下を歩き、ドアを開け…。やつぱり現実つてやつ上手くできてないよね。

「あ…あのお。」

「あら、幹南さん、遅いから来ないかと思つたわ。来てくれたのね。」

何故か私の名前を知つていて…、来てくれたつて言つた?

「あのお…。」

「あ、私、200の三円美喜つて言こますー。よひじべ。」

「よ、よひしくお願ひします…？」

ああ、握手とかしあやつてるよ。なんかすごい笑顔だよ。何この人ー！

「えつと、ここ呼んだのは他でもないわ。私あなたに惚れたの。」

「

…」の人に何言つてんだろう。

「あの、頭とか打ちました？」

「あら、毒舌なのね。そういうのも良いわ。あとね 私は本気よ

？」

「ううつわけで私たちの交際（…。）は始まった。



## 新たな出会い

「又柚ー?」飯食一ベよー

すでに日課と化してしまった毎。『私はOKした覚えはない!』  
ほぼ強制的に屋上へ連れていかれる。そのあとから少年も着いてくる。

高校入学してから一度目の春。私は無事進級し、クラスの仲間と  
別れんのやだなーとか次のクラスでうまくやつてけるかなーとかぼ  
んやり考えてたとき、

「やーゆーー！」

ああ、今日も朝から…

「わっ、危ない！」

「うづづ

華の女子高校生…なんといつ言葉を使つてしまつたんだあ！

それより…

「痛ーい！」

「マジで」めん。君大丈夫？怪我ない？」

「又柚」めんねえ。ついつい興奮しちゃってねえ。そしたらコマイツがハンドル操作を…」

「完璧お前のせいだろ！もつと真剣に謝れ！」

「大丈夫よ、又柚はたくましいから。ね、又柚？」

『ね、又柚？』じゃないだろ！急に自転車がぶつかってきたと思ったら、美喜先輩と見知らぬ少年…って

「先輩、彼氏いたんですか！」

「えー、何でそつなる。てか美喜って呼んでつて言つてるでしょ？」

「じゃ、その人誰ですか。先輩と男子が普通に話してるとこ初めて見たんですけど。」

「え、スルー？彼女に対する愛情が…」

「コイツは姉貴。俺は同じ学年の三月睡遊都。よろしく。」

姉貴…？

「あつ、先輩の弟さんですか。」

納得。そういうえば田元とか似てる気がしなくもない。

「今年からこっちに転入。それでこいつが調子乗って俺の自転車に…」

「それが『お姉様』に聞く口?たまには『姉貴、乗つてけよ。』とか言ってくれたって良いじゃない。」

「死んでも言わないね。じゃ、叉柚行こつか。」

「いらっしゃー。私の叉柚を取らないで!叉柚、お見送りしてよね。」

「こきなり呼び捨て!?しかも何この板挟み!」

「こんな感じに私たちが出会った。

「この出会いいで私の勉強詰めの退屈な毎日が輝き出したんだ。」

「…そへへやあ、あゆひつまほおほはへひやつて」

やつと我に返ると異国の言葉を話している人がいる。

「姉貴、汚ねえから食べ終わつてからしゃべる。しかも何言つてんだかマジわかんない。」

「うふまひはねえ。あんははだはつへほーあたひは叉柚ほはなひへんのよ。(ドヤ)」

何故にセコでドヤ顔?必要な部分か?とゆつか、私思い出に漫つてて全く聞いてなか…

「叉柚ずつじぽーつとして聞いてねえよ。」

そ…その通り。

「えー。叉柚、それは酷いわ。人が話してるときは田を見て話すつてお母さんに教わらなかつた?」

「姉貴も叉柚の目なんきや見てねえだろ。」

「叉柚の顔見てたらもつとろひけて見れないわ。(ウインク)」

「あ、叉柚、もうすぐ夏休みだよな。」

「 そうだよね。高2の夏しかもう遊べないからじゃんじゃん遊びたいな。」

「 ちょっと、スルー？スルー？酷いわ！あんまりだわ！… そうだわ、高校最後の夏。いっぱい遊びましょう 」

切り替え早っ！てか先輩進学しないのか？大丈夫なのか？

「 大丈夫だよ。姉貴勉強は出来るから。」

「 ちょっと唾遊都、だけって何よ。だけって… もっと私良いとこいっぱいあるわよ。かわいいとか美人とか… 」

「 はいはいはーい。受験生はほつといて、どこに行こうが、叉柚。」

「 あら、デートなんか許さないわよ。叉柚は私のものなんだから。」

「

兄弟の共通点その一。人の考えは丸つきり無視する、つと。はあ。

## 天才

「はーい、じゃ、成績表返すよー。」

学生ならわかるだろ？。返さなくて良いと切実に思つ。このまま  
帰りたい…。

「…松木。もっと頑張れ。えー三月。その調子でな？」

「あ…はい。」

私は正直しゃべるのが苦手。人の気持ちを考えるつてのが出来ないんだよね。

13位か…。良いんだか、悪いんだか…。

「叉袖ー。ビーだつた？（ニカツ）」

なんだ？その満面の笑み…。身の危険を察知し、睨んでみる。そんな様子も気にせず、私の前に紙をやる。

「…。啞遊都？これ何？」

「何つて見ての通り成績表。」

オール5。高校でこれは…。

「啞遊都、お前まさか天才か？」

微笑んだまま…。

私の通つてる学校は県立一の学校。…あり得ない。

まさか兄弟そろつて天才とか？

先輩の遊びっぴは…そういうことか！  
全く嫌なヤツらに絡まってしまった…。

「又柚？暗い顔してどした？」

お前らのせいだ！本人は気づかないもんだよね。全く…。

「美喜一。これ教えてー。」

「…」

いつもいつも変わらない日々。学校行って家帰つて。単調に毎日は過ぎてつた。

昔から勉強もスポーツもできる方だった。いつもみんなに頼りにされてたし、楽しく生活していた。

けど、みんな私と勉強の話しかしない。テレビなんかつまらないから見てないし、恋なんかしたことないし、したいとも思わない。部活も入っていない。

私のまわりにはいつも友達がいた。

でも、私はいつも一人だった。

いつも孤立してたんだ。この才能のせいでの

純粹だった私はいつも周りに人がいて幸せ者だつて思つてた。

私には親がない。弟と一緒に孤児院に預けられた。普通じゃな  
いから。

親は病気で亡くなつた、と言われてきた。でも、ある日親からの伝言を聞かされてから、私は人を信じられなくなつた。

## 夏休み初日

今日も普通な日になる…はずだった。

夏休みも始まり、ゆったりと過ごそうと思つてた。

「又柚、そんな成績で大丈夫なの？」

…ですよね。

目標は高く！

ということで、私は医者の夢を今まで諦めていない。

こんな成績じゃダメなのはわかつて。でも精一杯やつてゐることも空回り。

そんな悩みを抱えたままなんの解決策もなく夏休み突入の一日前の朝。

私は着信音で目覚めた。

とっても、とっても嫌な予感…。

予想通り、画面に『美喜先輩』の文字。

はあ…。やっぱり私の夏休みは普通にならないんだな。

「もしも…。」

謝る気だろ。

「なんですか。」

「冷たーい。あのね、ウチ来ない?」

この人何企んでんだろう？

じや、7時に迎えに行くから。ブチツ

えー。まだ何も言ってないのに…。  
迎えに来るなら断れないな  
準備するか。

「良い?しつかり聞いてね。」

空気が強張ってる。

「あなた達の親はあなた達が怖くてここに預けたの。きっと戻つてくるって言つてね。」

すぐには理解が出来なかつた。親は生きていた。私たちが…怖い?

私たちは人の考え方を当てるという特技を持っている。

これは超能力とかじやなく、人の思考方法や表情、過去の言葉等色々なことを統計して、ようするに計算で割り出してるだけ。

幼児期からその能力を發揮し、親は私たちから離れていった。

人はそういうものなんだ。

変わつてるのはみんな仲間はずれ。

いつかみんな離れていく。

それなら私だつて深く関わらない。

『どうせ裏切られるなら傷は小さい方が良い。』

そのときからそんな風に思つよつになつた。

その翌日の数日後、私たち宛に手紙が届いた。

## 迎え

ピンポン

「又柚一。迎えに来たぞ。」

「え？ 何で唾遊都？」

「姉貴に頼まれた。ほら、行くぞ。」

「あ、う、うん。今自転車用意するか？」

「良い。乗れ。」

「乗れつて……後ろに？」

「重いから良いや。」

「姉貴乗つけてんだから大丈夫だよ。行くぞ。」

「あ、待つて。」

「しっかりつかまれよ。」

真夏の朝。唾遊都の背中にしがみつきながら、風を切り、心地よい風が吹く。

『「そのままずっとといたい。』』

不意にそんなことを思った。  
恥ずかしさに顔をうつ向けて、先輩の家に向かつたのだった。

## 手紙

美喜、哩遊都へ

私達はあなた達を捨てました。  
もう会うことはないでしょう。

あなた達が読む頃に私達はこの世に存在しないのだから。

あなた達には才能があります。その能力はしっかり發揮してください。

私達は貧乏でした。あなた達を伸ばす程のお金がありませんでした。

私達は考え、考え尽くした上であなた達を捨てる道を選びました。

あなた達がこの手紙を読む頃、あなた達は中学生になつてているでしょう。

これからあなた達は我が家に住んでもらいます。

普通に暮らしていくおお金は用意しました。

無事、高校、大学へ行つて一人で仲良く暮らしてください。

母、父より

…。

何この手紙。遺書…。一人で暮らす…。金はある?

才能を伸ばすため?私達の為じゃない。あなた達は逃げた。

みんなみんなわかつてない!わかつてくれない。もうわからなくて良い。

私は弟だけを信じて生きる。

もう誰も信用しない。

衝撃の告白を聞いた直後だからか、私の頭は混乱していく、この世の全てのものに価値がないような気がした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1575z/>

---

MIKKI -

2011年12月5日18時59分発行